

## 11. 『古い夢』

太白先生\* の『古い夢』がまもなく出版されるので、わたしに小序を書くようにと回って来た。様になる序文はおそらく書けないので、いまはただ同郷の資格で言いたいことを言うだけだ。

太白先生には会ったことがない。三四年はともに小さな町に住んでいたのだけれども。しかしわたしは彼の家を知っており、彼の姓名——今と昔の姓名を知っており、彼の学業を知っている。これらのことをわたしはむろん深くは知らないし、この詩集ともそれほど大した関係はないから、縷々述べることもないが、その中にはちょっと注意すべきことがある。つまり彼の旧詩文の年季である。民国初年、彼が『禹域新聞』に多くの著作を発表したことは、当地のものなら大抵まだ覚えている。当時わたしの得意の投稿文「ギリシアの女詩人」も、この新聞に載ったのであった。何年かたって、太白先生は新詩を作るようになり、この『古い夢』はその結果である。彼は自分でも詩には相変わらず伝統の気味が多いと言うけれども、わたしはそうは思わない。わたしから見れば、少なくとも『古い夢』という部分においては、彼は極力旧詩の情趣を振るい落としており、わたしの異説を容れるならば、振り落としたものがあまりに多すぎて、詩味がどうも薄くなっているようなのだ——これはあるいは哲理が詩に入ったためかもしれないが。いまの新詩人が往往にして旧体を作り、多才を誇示したがるのは、好奇の過ちというべきで、太白先生が豊かな旧詩の蘊蓄を存分に利用しなかったのは、やはり残念である。わたしはあまり楽府調・詞曲調の新詩を好まない。しかしそうした円熟した字句は新詩にとってはまさに必要である。ただそれに相応しい運用がなされなければならない。詩は決してもつぱら意味を重んじないし、そして白話も結局は漢語なのだから。

わたしは他の事では地方主義をいうのは嫌いだ、ただ芸術上ではいつもこの違いを感じている。太白先生は会稽の平水の人である。この事はわたしにはとても興味がある。当初『禹域新聞』に付録された『章実斎文集』『李越縵日記鈔』の類は、次々と合訂されて『禹域叢書』となり、わたしは愛読者の一人であったし、しかも自分でも力を尽くして清朝の越中文人の著作を蒐集した。この癖は現在でもまだ残っている。いまではもとより必ずしも郷曲の見を取って批評をするわけではないが、風土の力は文芸にとって極めて重大だと思うので、終に始終それを考えている。幼いころ平水に行ったことがあり、詳しい情景はもう思い出せないが、ただあの大溪の印象はまだかすかに脳裏に残っている。蘭亭・鑑湖・射的・平水・木柵といった場所の景色を思い出すと、まるで朦朧として集まりあって、一幅の“混合写真”になるように思われ、その誰もがそこからいくばくかの形似を読み取ることができる。われわれは決まって素材に明らかな郷土色を持たせる必要はないが、ただ何かの一派の垣根の中に潜り込まず、その自然の成長に任せさえすれば、格好の地歩を占めて、個性ある著作になれよう。だがわれわれの時代の人、狭隘な国家主義に対する反動として、たいていはある種の“世界民”（Kosmopolites）の態度を養っている。容易に郷土の気味を減らしてしまう。これはやむを得ぬこととは言えやはり残念に思われる。わたしは相変わらず世界民の態度を取り消したくはないが、そのためにこそ地方民の資格を

感じねばならないと思う。なぜならこの二者はもともと相関するもので、ちょうどわれわれが個人であるから、“人類の一分子” (Homarano) であるようなものである。わたしは伝統的愛国的な偽文学を軽蔑する。しかしながら郷土の芸術についてはとても愛重している。わたしは強烈な地方趣味もまさしく“世界的な”文学の重大な成分であると確信する。多方面の趣味を具えながら衝突し合わず、調和した全体を作り上げる、これが“世界的な”文学の価値である。でなければ“抜かれた樹木”であって、大森林に居並ぶことができないばかりか、まもなく枯れてしまうであろう。わたしはいつもこうした私見を抱いて詩文を読む。風土によって著作を考察することは知っているが、著作に就いて風土を推測想像することは知らない。もし先入主に固執し、事を穿鑿しすぎると、当然弊害が出てくるが、わたしはかなりの意義があると思っている。太白先生の郷土はわたしが知っているところで、これがわたしに彼の詩集について特別に興味を感じさせた原因である。

太白先生の詩にどれだけの郷土趣味があるかは言えない。これは彼に勘弁してもらわねばならない。彼が『古い夢』のなかでもっと多く彼のほんとうの今昔の夢を、もっとはっきりと平水の山光を、白馬湖の水の色を、そして大通りに街の音を描き出せるよう希望する。これはもちろんわたし個人の願いでしかなく、他の何でもあり得ない。——しかもわれわれの誰がそんな地歩を占めることができているか。われわれはこの良くも悪くもある時代に生まれ、自由な創作ができ、逆にまた伝統の圧力に重くのし掛かれ、子どもも一緒になければ桶の水も流せないような状況になっているから、われわれの従来のはただ反抗を表すだけであって建設はではなく、国家主義に反抗したので郷土色が薄れ、古文に反抗したので文言の字句が滅多に使われなくなった。これらはみな昨日の夢のようで、まだはっきりとわれわれの脳裏に残り、——自分の言葉の上に残っている。

以上述べたのは決して太白先生の詩に対する批評ではなく、ただわたしが『古い夢』という部分を読んで起こした感想に過ぎない。読者が批評を読みたいと思うなら、最も良いのはその巻首の“自記”を読むことだと思う。——かなり謙遜の言葉が多すぎるようだけれども。というのは、思うのだが、著者自身の言葉はどうころんでも他人のに比べてやはり信用がおけるからである。一九二三年四月八日。

※初出：1923年4月12日『晨報副刊』

---

\*劉太白（1880～1932）、金慶棧改名して劉靖裔、字名は太白。紹興平水の人。現代詩人、文学史家。『旧夢』はその詩集。